

《スワッピング・シチュエーション》

■ 体験版 ■

「スワッピングしてみる？」と冗談のつもりで言ったら、
親友の彼女がその気になってイロイロ困るっ！? ①

なつめ

なつめ

夏目 棗

□ □ 注意事項 □ □

普通にこのPDFファイルを開くとウィンドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大（100〜125%くらい推奨）して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□□登場人物□□

● 葛木 花恋(かつらぎ かれん) || 椎葉(しいば) 大学二回生。
身長: 152 cm、体重: 49 kg、スリーサイズ: 82(Cカップ)・52・86。



● 俺の彼女。椎葉学園の同級生でその頃からの付き合い。親友の喬郎は俺が // 尻に敷かれてる” と言うがそんな事は無い……ぞ。

● 華和 征嗣(はなわ せいじ) || 椎葉大学二回生。
本篇の主人公 || 俺さまだ(笑)。

● 澤木 聿子(さわきりつこ) 椎葉(しいば)学園二回生。
身長: 169 cm、体重: 53 kg、スリーサイズ: 96 (Gカップ) ・ 48 ・ 89。



喬郎の彼女。二つ下だが俺たち三人の中に居ても違和感のない、とても色っぽくて良い女だ。いや、学園の制服を着ていなければ花恋より年上に見えるのはたぶん俺だ

けでは無い……答だ。

● 栗栖 喬郎(くるす たかお) || 椎葉大学二回生。

C 等部からの付き合いで俺の親友。花恋の幼馴染みで、聿子の彼氏。

その日、期末考査が終わった開放感から俺たちはかなり呑んでいた。

メンバーは俺と俺の彼女の花恋(かれん)に、俺の親友の喬郎(たかお)と彼の彼女の聿子(りつこ)のいつもの四人で、花恋の部屋である。

だから俺がそんな言葉を、つい、口にしたのもたぶんその解放感と酔いの所為だったと思う……いや、思いたい。

「……だからな、スワッピングに興味があるからって、それでイキナリ『変態』扱いされるのって、それは無いだろっ？」

俺は先日、同じ言葉を投げ掛けた時に花恋から蔑みの視線を投げつけられたコトを思い出しながら喬郎と聿子に訴えたのだった。

「……………」

「——って、喬郎、お前もう酔い潰れてんのかよっ？」

「うん、喬(たか)ちゃん弱いから、ねえっ……」

聿子が机に突っ伏している喬郎の手からグラスを取りあげて安全な場所に退避させてから続けた。

「……でもう、あたしも『変態』は言い過ぎだと思う……かなっ？」

聿子が自分のグラスを傾けながら俺に賛同の意を表した。微妙に彼女の重心がこちらに傾いているのか、とても良い匂いがした。

だから、つい俺の口も軽くなっていった。

「あつ、聿(りつ)ちゃんもそう思う、よね？ ……もしかしてスワッピングにも興味あるっ？」

勿論、軽い言葉のキャッチボールのつもりだったのだが、聿子の返事は俺の想像の斜め上をいっていた。

「ある、あるう♥」

「……それじゃ、スワッピングしてみるっ？」

当然だが俺の返しも言葉のキャッチボールの流れで冗談だったのだ。

花恋に思い知らせてやろう、というか彼女の性的なコトへの偏った考え方を嬌声したいという思いも、もしかしたらあったかも知れない。

だから一呼吸あとで「冗談だけ……」とオチをつけようとしたのだが――。

「良いわねえ、しよう、しようっ♥」

聿子が俺の手を取って言ったのだった。

「えっ!?!」

俺と花恋は異口同音に叫んでいた(喬郎は酔い潰れている)。

「あれ、何か変だった……かなっ?」

まだ俺の手を握ったまま聿子が小首を傾げた。

「見ず知らずの他人とスワッピングしようっていうんじゃないんでしょ? ……この

四人でスルのに、何か問題でもあるう?」

「あ、ああ、あっ!?!」

花恋は絶句(?)している。

「あたしい、前から征嗣(せいじ)さんとう、シてみたかったのう♥」

酔っているからか、聿子が色っぽい目つきで俺にしな垂れかかってきた。良い匂いが更に俺を包み込む。

「り、りり、りっ!?!」

花恋は相変わらず絶句(?)している(もしかしたら『聿(りっ)ちゃん』と叫んでいるのかも知れない)。

そして、俺の鼻の下は伸び切っていたのかも知れない。

「……いち、いちちっ!?!」

俺は花恋に脛を抓ねられて声を押さえて視線を逸らせた。

しかし、未だ握られたままの聿子の手を振り解けないのは、俺の責任だろうか。

「喬(たか)ちゃん、起きてようっ！」

聿子が右手はまだ俺の手を握ったまま、左手で喬郎を揺する。

「あと、喬(たか)ちゃんがOKすれば良いんだからっ！」

「な、なな、なっ!?!」

花恋は相変わらず絶句(?)している。

正直に告白すると、親友の彼女である聿子に邪(よこし)まな想いを抱いたコトは無かった、と言えば嘘になる。

——いや「大嘘」になる。

それほど聿子は「誰が見ても」イイ女だからだ。

そんな聿子に手を握られて、更に『あたしい、前から征嗣(せいじ)さんとう、シてみたかったのう♥』などと言われて鼻の下が伸びない訳がないだろう。

「いちっ……ちちい!?!」

俺がまた脛を抓られたのを見て、喬郎を起こそうと揺すっていた聿子が不思議そうに訊いた。

「あらっ？ ……う〜んとう ……花恋さんもう 喬(たか)ちゃんが相手なら、ぜ〜んぜん、問題ないですよねっ？」

「な、なな、なっ!?!」

花恋はまたも絶句(?) している。

「だって、喬(たか)ちゃんと花恋さんって幼馴染みなんでしょ？」

「…:…:そ、そう、だけど？」

「幼馴染みだったら当然 “お医者さんゴツコ” とかしてますよねっ？」

「な、なな、な——っ!?!」

花恋はまたも絶句(?) している。

「…:…:って言うか、“初体験” の相手が幼馴染みって多いそうですけど…:…:？」

聿子は花恋と喬郎を見比べた。

「ち、ちち、ちっ!?!」

花恋の絶句(?) はもしかしたら『違う』と言いたいのかも知れない。

しかし、“初体験の相手” 云々は不明だが、花恋は俺が初めてでは無かった。更に、喬郎から花恋と “お医者さんゴツコ” 経験済みの話は聞いている。

俺の手を握り締めていた筈の聿子が隣で何やら、ごそ、ごそ、していると思ったら

いつの間にか下着姿になっていた。

「征嗣さんう、どうしよう……あたしい、スイッチ入っちゃったかも♡」



そう言つて聿子はその学園女子にあるまじき「けしからん膨らみ」を俺に押しつけてきた。更に学園女子にあるまじき「黒いショーツ」がエロ過ぎる。

「り、りり、りっ!？」

相変わらず絶句（？）している花恋の背後に廻った聿子は、更に彼女の服も脱がし始めたのだった。

「ちよ、まつ、まへっ!？」

必死に抵抗する花恋の上半身を抑えつけた聿子が俺に顎を杓った。

「征嗣さん、花恋さんのGパンを脱がしてっ！」

コトここに至って俺も覚悟を決めた。

後で花恋に罵られるのと、いま聿子とスルのを天秤に掛けたら……答えは一つだ。

「ちよっ!?!……征嗣の莫迦っ、助平っ、変態いつ!？」

背後から聿子に上半身を羽交い絞めにされて、しかも胸を揉みしだかれて身悶える花恋のGパンを脱がす俺を彼女の両足が、げし、げしっ、と蹴ってくる。

その隙に聿子は花恋の上半身も脱がせてしまった。

「り、聿(りっ)ちゃんの、莫迦くっ!？」

ブラジャーとショーツ姿に剥かれた花恋が真っ赤になって縮こまる横で、聿子がインナーを脱ぎ捨てると『推定Gカップ』の美巨乳が、ふるるうんっ、とまるびでた。

「聿(りっ)ちゃんって、いつもノーブラなのっ?？」

「だってえ……締めつけられるのう、嫌いなんだモンっ♪」
その言葉に思わず花恋を見た俺を彼女が睨みつける。
「いや、花恋のオッパイも形が良くて好きだぞ、俺はっ！」



「う、うるさいっ、助平っ、変態いっ!?!」
俺たちの言い合いを「生暖かい」目で見ながら喬郎を起こそうとしていた聿子が諦めたように言った。

「喬(たか)ちゃん起きないから、最初は三人でえ、しましようねっ♥」

「さ、ささ、さっ!?!」

花恋がまた絶句ループ(?)に陥った。

「俺さあ3Pって、まだ経験ないんだが……」

俺は極力花恋を見ないようにして聿子に訊くと、彼女はテーブルを隅に片づけてから床のマットに顎を構った。

「征嗣さん仰向けに寝てください……あたしと花恋さんが両側からシックスナインみたいに重なって、まずは舐め舐めし合うのう♥」

そして、言われた通り横になった俺の下半身の辺りに膝をついた聿子がズボンを脱がし、ボクサーブリーフに手を掛けて、にまつ、と笑った。

「やだあ、もしかしてえ……もう、勃起してますう?」

「り、りり、りっ!?!」

相変わらず絶句(?)している花恋に視線を投げて、聿子は少しばかり突き放すように言った。

「花恋先輩が参加しないなら……あたしが征嗣さんのおちんぼ、独占してもいいですかっ?」

わざわざ出会った頃のように『花恋先輩』などと呼んで聿子が挑発する。

「ああんっ♥ 征嗣さんのおちんぽ、想像してたよりい……大(おつ)きいですう♥」
ボクサーブリーフを膝まで摺り降ろした聿子が俺の《逸物》に見蕩れている。



(言っとくが、まだ半勃ちだからなっ！)

「ま、ま、ま、待ちなさい、よお！」

幾分絶句ループ（？）から脱した花恋が聿子の反対側に膝をついた。

「さ、三人で……って……ど、どう……す、する、のよお……」

まんまと聿子の挑発に乗せられた花恋が何故か俺を睨みつけた。

「こうやって、反対向きで両側に寝てえ……」

聿子が実際に俺の身体に密着するように身体を横たえた。

「それでえ……征嗣さんのおちんぽを舐めるかあ、それとも征嗣さんにおまんこ舐めて貰うかあ、どっちが良いですかあ？」

「にや、にやに、ひっへ……」

聿子の提案にループはしていないが花恋が絶句した。

今までの彼女との体験から言って、花恋はエッチに関して潔癖過ぎるという程でも無い……と思う。だいたい、俺と付き合い始めた学園の二回生の頃に、既に経験済みだったのだ（まあ勿論、俺も花恋が初めての相手じゃ無かったが……）。

ただ、人前でエッチを話題にするのを嫌がる——というか恥ずかしがるようなトコロがあった。

あるいは今日のように四人で呑んでいる時など、喬郎と聿子が平然とキスしたりすると目を逸らすし、俺が同じようにキスしようとするのと花恋は拒む。俺たち四人しか

居ないのだから別に良からうと思うが、花恋にはそんなトコロがあった。

だから、聿子を交えてのフェラかクンニかという二者択一は花恋には無理だろうと思っただが……のだが。

「……………じゃあ……な、舐める、方……」

暫く固まっていた花恋は聿子から視線を逸らしたままそう言ったのだった。

「それじゃあ征嗣さん……あたしのおまんこう、いっっぱい、いっっぱい、舐め舐めしてくださいあゝゝゝいっ♡」

想定外(?)の花恋の参戦にも動じるコトなく聿子はショーツを脱ぎ捨てて俺の顔の上に跨ってきた。勿論、上半身は横に摺らせて花恋の為に俺の《逸物》を明け渡している。

「征嗣……ほ、ホントに……す、する気なのっ？」

一応、聿子の反対側に身体を横たえた花恋は俺の《逸物》を、ちら見、しながら訊いてきた。

「ほら、ほらあ……」

聿子が俺の《逸物》の根元を握り起こして今にも舐めたそうに唇を近づけては花恋

に向かって挑発を繰り返す。

(や、やばい……聿(りっ)ちゃんの手だと思うと根元を握られただけで、気持ちええええっ♥)

「征嗣さんのおちんぼ……舐めて欲しくて、びくん、びっくん、してますよう♥」

「……うう、ううう……」

ここまでされても覚悟が決まらないのか、ちら見、しながら呻く花恋を尻目に聿子が唇から舌先を、ちろ、ちろ、覗かせてファイナルアンサーを求めてきた。

「あたしが、舐め舐めしてもう、良いんですか〜っ?」

「おほううっ♥」

しかし、返事の前に《逸物》の先に湿った感触が触れて俺の喉から声が洩れた。

(——って、これ花恋じゃなくて、聿(りっ)ちゃん……だよな?)

俺が聿子の股の間から覗き見ようとすると、こちらも幾分湿った感触が俺の唇に押しつけられた。

「うぷう!？」

更に聿子が俺の顔の上で、ぐり、ぐり、と腰を振るので俺の鼻先にエロい匂いが纏わりつく。

流石に俺も限界だった。

両手をあげて俺の顔の上に跨っている聿子の両尻を掴んで引き降ろし、湿った感触にベロを挿し込んだのだった。

「あひあああああうんっ♥……征嗣さんのおベロう、きたあああああんっ♥」
「むうううっ!?!」

聿子の幾分わざとらしい嬌声の陰で、たぶん花恋の不満気な呻き声も聞こえた。

そして、《逸物》の先端が咥えられたが、感触からしてこれは花恋に間違いない。

更に俺の内股から玉袋へと這い廻るベロの感触は、これは聿子だろう。

俺も負けじと両手の指で聿子の《秘唇》を割り割いた。

「おほうおおおっ♥……聿(りっ)ちゃんのマンコ、真っピンクだっ♥」

「やん、やあん♥……征嗣さんってば、そんなに広げたら……あたしい、恥ずかしいですううううっ♥」

「むうううっ!?!」

またも聿子かわざとらしく恥じらってみせる声の裏で、たぶん花恋の不満気な呻き声もまた聞こえた。

「いや、花恋はこんなに堂々と見せてくれないからさあ……」

「やああんっ♥……あ、あたしだって『堂々と』なんて見せてないですう♥」

俺の挑発に聿子はわざとらしく恥じらって見せたが、自分からマンコを押しつけてきた「ビッチ娘」がナニ言ってるんだか。

一方、花恋は啜えていた《逸物》の先端を、かぶんっ、と噛んできやがった（まあ、甘噛みってヤツだったけど……）。

「だけど、聿（りつ）ちゃんもつと遊んでると思ってたから……つと、ヤベっ——」
俺は思わず本音を口にしてしまったコトを直ぐに後悔させられた。

「むうううっ!？」

今度の不満気な呻き声は聿子で、更に玉袋を、かぶんっ、と噛まれてしまった。

「あたし、征嗣さん程う「おともだち」が多くないですモンっ!」

「いや、いや、俺だって「おともだち」は少ないぜ……」

「嘘つきい!」

「うん、嘘よっ! 大嘘っ!」

二人して俺を『嘘つき』呼ばわりしたあげく花恋はまたも、かぶんっ、と噛んできやがった。

「あちっ!……花恋、今のはちっと痛かったぞっ!」

「花恋さん、あたしの分も噛んでくださいっ♥」

「判った、任せてっ♥」

「いや、ちよ、まつ……いて、痛いって!?!」

「ありがとう、花恋さんっ♥」

「わ、判った、俺が悪かったっ!……お詫びに聿(りっ)ちゃんのマンコを丁寧に舐めさせて戴きやすっ♪」

「うむ、許して遣わす、ですわっ♥」

嬉しそうな聿子に反し、花恋は微妙な反応だったが……。

まあ、俺としては予定通りなので聿子の愛液を音を立てて啜り始めたのだった。

——あむんっ、じゅるる、ちゅぶぶっ……んふっ、ずじゅ……じゅるる、じゅぶぶぶう……ちゅぶぶっ、じゅるるるっ……んん、んぐっ……

「ひやああああんっ♥……征嗣さあくんっ、そんなに音立てて啜ったら……あたしい、恥ずかしいですうううっ♥」

(こいつめえ!……恥ずかしいなんて、絶対ウソだろっ!)

自分からマンコを押しつけてきたクセに『恥ずかしい』などと宣(のたま)う「ビツチ娘」にはお仕置きが必要だ。俺は左手で逃げられないように聿子の尻肉を掴んで固

定すると、右手を降ろして彼女の下草を探った。

「や、やだ、やだあつ！……せ、征嗣さんっ!?……そ、そこはまだ、弄っちゃだめ
ですう……あうう、きひひひひひひっ♥」



俺の意図を察した聿子が逃げ腰になったが、俺の指先の方が速かった。

探り当てた《突起》を摘まむと、びくっ、びくくくんっ、と聿子の腰に震えが走り
愛液の分泌が増した。

「う、嘘っ!? ……か、顔の上で……お、おおお、おお、おしっこう!?」
花恋が信じられないという顔で聿子を見た。

「ち、ちち、ち、違う、モンっ! ……お、おお、おしっこじや、ないモンっ! ……
お、お潮だモンっ!?!」

必死に言い募る聿子が可愛くて俺としてはもう少し見ていたかったが、ここで助け舟をだしておくのは後々リターンを期待できるのではないかと思ひ、さりげなく二人に声を掛けた。

「大丈夫だよ、聿(りつ)ちゃん……全然おしっこ臭くないしい、花恋は経験ないから知らないだけで、潮噴き”なのは俺が保証するからっ♪」

「ああん、征嗣さっくんっ♥」

想定通りというか、想定以上だったというべきか、半泣きの聿子が身体の向きを変えて俺に抱きついてきた。

そして「ありがとう」やら「うれしい」やらを連呼しながら聿子は俺の顔を舐め始めたのだった。

「聿(りつ)ちゃん、それ、擦ったいってば……」

「だめくえ、せくくんぶ、あたしのおベロで綺麗に舐め取るのう♥」

しかし、俺は擦ったいコトよりも、上に被さってきた聿子の柔らかな下腹に押し潰された状態の《逸物》が、がっち、がち、になっついていて困った。

「り、聿(りっ)ちゃん……そ、そろそろ……えっと、その……挿(い)れたいんだが……ど、どうかなっ？」

俺はさり気なく提案してみた。

「う、うんっ♥……あたしもう、このおちんぼ、欲しいですう♥」

聿子が蕩けた顔で腰を浮かすと両手を降ろして俺の《逸物》を握りしめた。

「——って、やだあ……さつきより大(おっ)きくなってるんですけど♥」

そして、俺の上で上半身を起こした聿子は騎乗位のマウントポジションを取ってから花恋を見て言った。

「それじゃあ、花恋先輩い……この極太おちんぼ、お借りしますね♥」

一方花恋は聿子には視線を合わせず俺を睨みつけている。

(いや、俺が悪いのか？……ま、まあ、俺が悪い……かなっ?)

それから聿子は俺の《逸物》を素股で咥え、前後に腰を振って愛液を塗してから握り起こした。そして、俺に艶めかしい視線を絡ませた聿子は《逸物》の根元を握り自らの手で寛げた臍口に宛がって言ったのだった。

「いっ・た・だ・き・ま・あ・すう♥」

そして、ゆつくり、と腰を沈めてゆく聿子の表情に官能の揺らめきが浮かび、半開きになった唇から小さな桃色の舌先が、ちろ、ちろ、と覗く。

「あん、ああん、んんっ……ど、どうしよう……い、挿(い)れただけでえ……き、気持ち、好いようううううううっ♥」

そのまま腰を沈めていった聿子の尻肉が俺の下腹部に届いた時、彼女の全身を快感の小波が昇ってゆくのが見えた。

「ら、らめえええええええええっ♥……し、子宮が、持ちあげられてるのう♥」
聿子の官能に咽ぶ声に花恋が反応した。

「な、なに、それっ？」

「えっ？」

蕩げ顔の聿子が不思議そうに花恋を見た。

「花恋先輩、このおちんぼに子宮が持ちあげられないんですかっ？」

「なっ!?!……わ、わわ、わたし……そ、そんな恥ずかしい体位、しないわよっ!?!」

花恋は耳まで真っ赤になってソツポを向いた。

「嘘でしょっ!?!」

呆れ顔の聿子が俺を見た。

俺は聿子の下で寝転がったまま両手を軽くあげて肩を疎めるしかなかった。

「まあ、せつかくだし、花恋に騎乗位の良さを教えてやってくれよ……」

「うふんっ♥……まっかせてえ♥」

俺の意図を察した聿子が腰をくねらせて、啞え込んだ《逸物》を思いのほか狭隘な臆壁で扱き始めた。

「ほおう、おほほう♥……聿(りっ)ちゃんのマンコ、良い絞めつけだぜえ♥」

「ふふんっ♥……ほぼ、真っ新(さら)な狭さでしょうっ♥」

「いや、そこまでとは……言っていないが……」

「むううっ！……いい、言っとくけど、征嗣さんのおちんぽでまだ——っと、やば……」

……ま、まだ……え、えっと、そう片手……う、うん、片手の内ですからねっ！」

俺の挑発に聿子は言わなくても良い事まで口にしていた。

「ギリ、片手っ？」

「う、うるさいっ！」

視線を逸らせて聿子は誤魔化すように腰を振り立て始めたのだった。

「あん、ああん……ほ、ホントにい、子宮が持ち、持ちあがるのう♥」

「今までの五本じゃ経験できなかったサイズに大感謝、だろう？」

「ご、五本じゃ…あ、あん…無くて…：…か、片手内、だつてばあ！」

あくまで『片手』を主張する聿子を懲らしめようと、俺はその腰振りにタイミングを合わせて下から突きあげてやった。

「あん、やあんっ♥…：…し、下から、ずん、ずん、しゆるのう、禁止い♥」

「気持ち良いだろっ？」

「うん、うん、好いよう♥…：…征嗣さんのおちんぼ、最高っ♥…：…お、おく、奥まで、とどきゅのおおっ♥」

時々呂律を纏れさせながら聿子が腰を振り立てる。

親友の彼女とはシテしまった。これが浮気にならない為には俺の彼女が親友と入れ
ば良いのだが――

とまあ、今回の体験版Ver. 01+は「」までです。本篇を「」期待戴ければ幸いです。